

第2分科会の検討に関連するこれまでの会議での意見等

1 学校配置の方向性の検討に当たっての視点に関すること

第1分科会の検討過程で挙げられた意見	第3回検討会議（R6.2.28）における意見
【「高等学校教育を受ける機会の確保」と「充実した教育環境の整備」に関すること】	
<p>○ 子どもたちが自分の力ではどうすることもできないような家庭の経済状況などによって、学びたいのに学べないということがないよう、子どもたちの学びたいという思いに応えられる環境づくりが必要である。</p> <p>○ 人口減少が加速度的に進む中、今後の本県の推定人口を踏まえると、更なる高校教育改革の必要性を強く感じるが、単純に高校を閉校してしまうことで、子育て世代、若い世代が各地域から流出し、地域が衰退する。</p> <p>○ 限られた財政の中でより良い学びを実現するには、ある程度以上の規模の学校へと集約する必要がある一方、県の人口減少や産業構造等も踏まえる必要がある。</p>	<p>○ 「生徒は人と関わる活動の中で成長していくもの」とあり、理解はできる一方で、コロナ禍において様々な教育活動が制限される中、ICTの活用は子どもたちの成長に繋がったという事例もある。郡部の学校や地域校からは、学校規模にかかわらず、高校を存続しないと地域が衰退してしまうという意見も聞いている。</p> <p>様々な意見がある中、何に重点を置いて人財育成を進めていくのが大事な視点である。</p> <p>○ 意識調査では、「高校で身に付けたいこと」として、中学生や高校生は「人間関係形成力」が他の項目と比べ高い割合となっている。人口減少やICTの発達に伴い、生徒の質が大きく変わってきており、このことは、これからの教育において我々が考えなければならない課題である。</p> <p>○ 「高等学校教育を受ける機会の確保」については、全ての教育活動のベースであり、市部の大規模校や郡部の小規模校、個別の事情を抱えた生徒への対応ができる定時制・通信制課程の高校など、全ての生徒が希望する高校を選択できるような環境を整備する必要がある。</p> <p>一方で、多様な選択科目の設定や、多様な部活動の選択肢の確保、学校行事をはじめとした特別活動等の充実、進路志望に応じた学習指導など、「充実した教育環境の整備」も、高等学校教育の質を確保する上では必要不可欠である。全国や世界で活躍できる人財を育成するためには、ある程度の学校規模の高校は必要であり、これからの時代に求められる力を育むためには、多くの人との関わりや部活動、学校行事が関係する部分も多い。</p> <p>西北地区の中学校長会が現在の中学校3年生に対して実施した意識調査では、「高校を選ぶ基準は何か」という問いに対し、「学校・学科・コースの特徴」が最も高い割合となり、次いで「部活動が充実している学校」、「学校行事が充実している学校」、「通学が便利な学校」と続いた。生徒はある程度の学校規模で、充実した教育活動が受けられる環境を求めていると感じた。</p> <p>「高等学校教育を受ける機会の確保」を念頭に置きながら、「充実した教育環境の整備」に重点を置くような方向性が望ましいと考えるが、何よりも生徒の学びたいという思いに応える環境づくりや、生徒が求める学校や学校規模について考えていく必要がある。</p>

【教育環境に関すること】	
	<p>○ 教育環境には、ICT環境を含む学校の施設・設備のほか、生徒同士の活動ができたり、学校行事をはじめとする特別活動等が充実したりしていることも含まれるものと考えられる。小規模校については、学校単体での行事等の特別活動の実施が難しい場合があるが、中学校や大学、地域との連携により実施が可能となるような教育環境の整備についても考えていく必要がある。また、心のケアを必要とする生徒への対応も教育環境に含まれるものとする。</p> <p>本検討会議では、教育環境とは何かということを具体的に挙げ委員間で共有することで、単に「教育環境を整備する」といった方向性のみで終止しないようにする必要がある。</p> <p>○ 意識調査では、「高校の規模・配置に関する考え方」について「小規模化したとしても、できるだけ高校を残した方がよい」と回答した割合が、前回の令和元年調査と比較し、大きく増加している。第2分科会では、こうした意識調査の結果も踏まえながら検討する必要がある。</p> <p>○ 教育環境について、委員間で共通認識を持つ必要があるため、次回の第2分科会（第2回）において、関連する資料の提示や、理解が深まるような運営をしてほしい。</p>

2 学校配置の方向性に関すること

第1分科会の検討過程で挙げられた意見	第3回検討会議（R6.2.28）における意見
【6地区ごとの学校配置に関すること】	
	<p>○ 現在、6地区に分けて学校配置を検討しているが、今後も6地区を基本とするかどうか検討が必要である。</p>
【学校規模に関すること】	
<p>○ 生徒は人と関わる活動の中で成長していくものであり、学校行事、部活動等の教育活動による教育的効果を上げるためには、ある程度の生徒数、教員数が不可欠である。また、教育活動では生徒同士のトラブルが生じることもあるが、それを乗り越えるよう支援することも大事な教育である。しかし、1学年1学級ではクラス替えもできず、結果的に転校、退学につながる場合がある。地域の実情もあるため一律にはいかないと思うが、学校規模の維持を基本に据えてはどうか。</p> <p>○ ある程度の学校規模の維持（1学年が2学級以上、できれば6学級以上）を基本とすることが望ましい。</p>	

【学級編制に関すること】	
○ 中学校は学年進行で35人学級編制となるため、高校においても少人数学級編制について検討しても良いのではないか。そのことで、教員の負担が軽減され、生徒と向き合う時間の確保につながるるとともに、多様な生徒への対応の充実が図られ、県立高校の魅力化につながる。	
【定時制・通信制課程の配置に関すること】	
○ 定時制・通信制過程は多様な生徒を受け入れていたり、希望する生徒が増加したりしていることからなくしてはならない課程であり、増やすことも検討が必要である。	
【再編の方法に関すること】	
○ 県内に留まる学生を増やすため、専攻科や高等専門学校のように、専門的な教育が受けられる高校を増やし、学費をかけずに高度な教育を提供してはどうか。 ○ 水産学科の単独校は全国的にも減少してきており、工業高校との統合やキャンパス制の導入など、他県では工夫しながら取組を実施しているため、これらも参考としながら検討する必要がある。 ○ 少子化が進んでいる時代において、各校が魅力化を図り生徒を奪い合うのではなく、これからは、学科の統合や組み合わせが大切である。 ○ 普通科と専門学科を組み合わせ、地域として総合学科の機能を待たせる等の大学科の組み合わせについても検討してはどうか。 ○ 学科により教育課程が異なるため、異なる学科を有する高校の統合は、学校行事が一緒にできなくなるなどといった課題もある。	

3 小規模校（地域校）の配置の方向性に関すること

第1分科会の検討過程で挙げられた意見	第3回検討会議（R6.2.28）における意見
【小規模校の配置に関すること】	
<p>○ 公共交通網の状況等、通学できない事情のある生徒にとっては、地域に小規模でも高校があることは大事である。小規模校のメリットは見方によってはデメリットであるとの意見もあったが、通学できない生徒のことを優先して考えてほしい。</p> <p>○ 今の大学進学は、総合型選抜等の一般入試以外の受験方法の割合が増えてきており、教員のバックアップにより普通科の進学に重点的に取り組む高校でなくとも、就職は元より大学進学もできる。小規模校であっても学力を身に付けることはできるため、生徒数の減少に伴い統合するという流れを止められないものか。</p>	<p>○ 「高等学校教育を受ける機会の確保」は、都市部を除き全国的な課題であり、本県においては、1学級当たりの人数を減らすなどして高校を存続させたり、通信制課程のようにスクーリングをしながら地域から参加できるような高校を設置したりすることなどが考えられる。</p> <p>○ 今後も人口の推移は変わっていくため、将来の魅力ある県立高等学校の在り方を考える上では、ハード面よりソフト面を充実させるべきであり、生徒数や学級数だけでなく、小規模校の充実という観点からも、学校配置について検討すべき。</p> <p>○ 人口減少の進行や立地条件、通学の不便さといった理由から、小規模校の入学者数が減少してきている。 小規模校の存続のためには、地元の子どもが入学するだけでは足りず、他の地域や県外から集まってくるような魅力のある地域、例えば、山が近くにあるスキーやスノーボードができたり、海が近くにある、様々なマリンスポーツや海に関する勉強ができたりするような環境があることが大事である。 地元は高校がなくなることで様々な影響を受けるとは思うが、小規模校の配置に当たっては、こうした環境があるのかを考慮しながら検討していければよい。</p> <p>○ 以前、鱒ヶ沢高校に勤務していたが、PTAや同窓会など地域の方々との触れ合いや、地元の幼稚園や小学校との交流により地域の人との繋がりが増え、生徒に郷土愛が醸成されているように感じた。小規模校に対して予算措置を講じ、充実した教育環境を整備することができるならば、小規模校を配置する方向で考えるのがよい。</p> <p>○ 小規模校における現状、特に、充実した教育を展開しづらい要因は何かを分析し、それらを解消するには何をどうすればいいかを考察するような議論を深めることが大事ではないか。（意見等記入票）</p> <p>○ 地域校に関する方向性については、これまで取り組んできた自治体との連携の実績等を十分考慮した上で個別に検討することが必要である。 各地域校では連携状況が良好で、持続可能なものになってきているなど、それぞれ成果を上げている。 今後の方向性を検討する際は、画一的な判断ではなく、それぞれの地域校の状況を十分に踏まえて個別に検討することも重要である。（意見等記入票）</p>

【地域校の活性化に関すること】	
	○ 地域校の中でも、鱒ヶ沢高校や三戸高校が報道等で多く取り上げられているが、小規模が存続するためには、報道等を活用しながら、県民や県外に向けて、学校の魅力や取組について情報発信していく必要がある。
【募集停止等の基準に関すること】	
	○ 地域校は、地域の協力の下、様々な魅力ある取組を行っており、新聞にも多く取り上げられているが、地域校の募集停止等の基準に該当した場合には、募集停止等に向けて、当該高等学校の所在する市町村等と協議することとなっており、そうなれば、地域の喪失感は計り知れないと思う。小規模であっても、十分に魅力ある取組ができているため、地域校の募集停止等の基準については、今後、検討する余地があると考える。
【ICTの活用等に関すること】	
○ 地域校の存続のためには、教育の質と教員の確保が必要であり、近隣の高校の教員と連携した授業（派遣方式）やオンラインでの授業（オンライン方式）、合同授業等の仕組みをつくり、小規模校の存続を検討すべき。	
【通学手段の確保・通学支援等に関すること】	
○ 自宅から離れた高校であっても魅力ある高校を選択するものだが、金銭的な負担が大きいのも事実である。魅力があっても通学できない高校も多いことから、通学できる環境づくりを検討する必要がある。 ○ 青森県内の郡部の生徒数の減少は顕著であり、地域の高校を維持できるかというところではないが、そこに住む生徒の学習機会を確保するため、通学可能な範囲や下宿で対応できるのかといった観点からも検討すべき。	○ 県が実施する通学支援等も大事だが、生徒の通学利便性という観点からは、自治体等と連携しながら、地域公共交通の利便性を向上させることも重要である。

4 学校配置と合わせて検討すべき事項に関すること

第1分科会の検討過程で挙げられた意見	第3回検討会議（R6.2.28）における意見
【人的・予算的な対応に関すること】	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 一部の進学校を除けば「入りたい高校」ではなく「入れる高校」を受検しているのが現状である。また、私学助成が手厚くなったことで公私の別なく選択しやすくなり、これまでに比べ通学の利便性や部活動の充実度等で高校が選ばれている。私立高校以上に多様な体験を提供するためには、人材の発掘や登用が必要である。 ○ 就学支援金制度もあり、県立高校と私立高校の垣根が低くなっている。県立高校も特色を出すためには、勤務年数に左右されない人員配置も必要である。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 教育に力を入れることにより、県全体の課題も解決していくことができることから、本検討会議において、人的・予算的な対応について強い提言ができればよい。 ○ 「充実した教育環境の整備」という観点で考えたときに、財政的な視点は欠かすことができない。以前、勤務した農業高校では、グローバルG. A. Pの認証取得に取り組んだ生徒が高校卒業後地域に残り、自らが生産したメロンを海外に輸出するなど、学校での学びを自分の仕事に繋げられるといった教育環境が整備されていたが、今後、学級数の減少に伴い教員数が減少し、実習のための農場の維持が困難な状況になれば、生徒に充実した教育環境を提供することは難しくなってくる。本検討会議において、財政的な支援をしっかりと行うべきであることについて提言してもよいのではないかと。 ○ 限られた予算や教員配置の中で検討するとなると抜本的な改革は難しい。（意見等記入票）
【私立高校との関係に関すること】	
<ul style="list-style-type: none"> ○ 地域に通学できる高校があることは重要であり、人口減少が進行していく中、私立高校との関係についても真剣に考えた方がよい。 	<ul style="list-style-type: none"> ○ 学費の差が少なくなっていることや入試の受検日が早いことで、生徒が私立高校へ進学しやすくなっているため、私立高校との関係も考慮すべきである。（意見等記入票）